

研究テーマ：英語に取り組む基盤づくりのために—スペルと語順の定着を目指して

所属 南国市立香長中学校

氏名 笠井由加里

RG JH2

1 研究の背景—提出済

2 リサーチクエスションについて

自分の思いを英語で表現できる基盤づくりのために、語順の定着とスペルの定着を図るにはどうすればよいか。

私たちは、生徒に「実践的コミュニケーション能力」を身につけさせることを期待されている。当たり前のことではあるが、英語で表現できるようになるためには、しっかりした土台作り(語彙、文法、発音、練習量)があつてのことである。

楽しい練習活動は必要ではあるが、今まで口頭の活動に目を奪われがちであったためにそれが本当にコミュニケーション能力の土台作りに役立つ方法で使われてきたかは、疑問に感じることも出てきた。テストに点が取れない(書けない)、自由に表現しようとしない、という問題が残されていた。それには、基礎力である語彙や文作りの基本である語順について練習を重ね自信を持たせることが大事であり、そうすれば、きっと英語を書いて表現する力も、話す力も伸びるであろうと思う。

3 予備調査

予備調査1 授業観察の結果、 予備調査2 英語力を示すデータ(別紙)—1学期定期テストにおける観点別到達度

予備調査3 アンケート (以下、授業評価の結果よりわかったこと)

- * 音では単語を知っていても、書いてあるものは適当に読めても、書くときは正確に書けないといけないうので難しさを覚えている。その原因としては、文字と音の関係が定着されていないこと、たとえローマ字を覚えていても、ローマ字のルールだけでは英語を書き表せないことである。
- * 読むこと、の理由の欄には、生徒が音読をイメージして理由を書いていることが見られる。
つまり、音のようにスペルしない単語に苦労しているのがわかる。

4 仮説の設定・実施の方法について

自分の事、身近なことについて英語で表現するためには、英語の語順の定着が必要である。また自信を持って読み・書くためには、単語が正確に書けることは必要である。

仮説1 フォニックスの指導を継続して行うことで、音と文字の関係について理解し、自ら考えて単語を読み・書こうとする態度がはぐくまれ、単語の定着率も上がる。

仮説2 語順指導を行うことで、表現したいことを自分で英語に直そうとする態度ができ、自己表現能力が上がる。

仮説3 授業の中に、自己表現活動を取り入れ、書く量を増やす。また、宿題の出し方で、書く練習を促す。

とにかく、基礎力がないのに英語を使ってコミュニケーションすることなどできないと考えた結果の仮説である。

5 計画の実施

ローマ字の復習をする。— 1 学期終了後、プロジェクト見直しの折、計画に入れた。

フォニックスの学習を定期的に入れて、定着させる。1 学期に 1 文字 1 音ルールを学んだ。1 学期の復習もしながら、少しずつ気長に続けていくことにした。ディクテーションを取り入れ、音と単語をつなげる活動を取り入れる。語順指導をしっかりする。細かい事がチェックできるので、書く活動を取り入れて、定着を図りたい。少しずつ単語を替えたりしながらライティングによるパターン練習をさせて、文法の理解の定着を確認したい。今まで、書かせる量が少なすぎたにもかかわらず、多くを要求していたように思う。

6 実践の結果

ローマ字の復習— 9 月より 50 音の行ごとに毎時間のはじめに確認プリントをした。

忘れかけていたローマ字もちゃんと覚えられて、よかった。復習して読めるようになった。(生徒アンケートより)

フォニックスの定期的な学習 - 1 学期に 1 文字 1 音ルールを学んだ。1 学期の復習もしながら、少しずつ気長に続けていくことにした。「らくらく英語王国入門編」を参考に「読み方ルール」のプリント学習を続けている。

読み方ルールをやってから単語が書けるようになった。ルールを勉強して、簡単な単語を覚えるようになって来た。だんだん英語が読めるようになってきた。読み方ルール最高！(アンケートより)

語順指導—書くことにつなげる活動が十分でなかった。書くパターン練習も取り入れた。「英語基本の基本」と称して語順講座ができた。その後も折に触れて復習している。文作りゲームを計画していたが、まだ授業の中ではできていない。

7 検証について

1 学期を終えたとき、予備調査として「生徒の英語力を示すデータ」として 1 学期定期テストの観点別得点率を提出したので、2 学期も同じデータを添付した。(別紙資料)

しかし、1 学期よりも学習内容も進み、難易度が高くなっているので点数だけで比較すると、どの観点においても下がっている。書く表現についての点数は極端に悪いが、条件付自由作文だったし、最後の問題だったので、時間切れで手をつけていない生徒もたくさんいた。したがって、本当に英語を書いて表現する力を計るものになっていない。むしろ授業でのライティング活動の結果のほうがフェアな結果としてみるべきである。

今回のテーマであるスベルの定着と語順の定着だけに焦点をしばった検証結果が出せていない。しかし、授業中にスベルを尋ねる生徒たちに、すぐに答えを教えないで発音しながら文字を問い直すと、自分で組み立てることもできるようになってきた。また、新しい単語を、「読み方ルール」をもとに自分で発音をしたりできるようになった。語順についても「英語の基本の基本講座」で教えた図などを示すと、答えを直接教えずとも自分で考えて、作文しようとする態度はできつつあると感じる。また、2 学期末にとったアンケートにも「英語の語順ルールがわかった」「もっと英語の仕組みをおしえてほしい」などと、これを知っていると英文が作れるのだという感覚は持ったようだ。

8 成果と今後の課題

ローマ字復習と「読み方ルール」の取り組みについては、アンケートの結果などから、私が力を入れて取り組んできたことはわかってきているようで、肯定的な評価が多い。また、「よくわかるようになった」「前よりわかるようになった」と自分の前進を自ら認めることができる生徒が多いので、このまま続けたい。語順ルールについては、人称代名詞目的格が出てくると同時に「目的語」の存在を意識付けて語順指導を行ったタイミングはよかった。しかしその定着

を計る活動を単語並べ替えゲームや文作りレースなどを取り入れ、しっかり検証し直す必要がある。